

靴の歴史散歩 ⑥0

皮革産業資料館 常任委員 稲川 實

向島の西村勝三の銅像は、昭和18年(1943年)軍需資材の不足による金属回収で、供出されたことは前にも述べたが、当時はこれを銅像の応召といい、美談として扱われたものである。

そして、昭和20年(1945年)8月15日、銅像を失い台座だけの姿で、敗戦の日を迎えた。

『西村勝三の生涯』(西村翁伝記編纂会・昭和43年刊)の〈附録〉「歿後六十年の皮革産業」にも「終戦によって、新しい民主化の線に沿って皮革産業興隆へ発足すると、想起されるのは製靴・製革創業の恩人である西村勝三翁のことである。戦前その銅像は、向島須崎町の西村家所有の庭園中央にあったが、戦時中に軍需資材として献納してしまっただけから、荒廃した土地に英姿なき土台だけがわびしく取り残されていた。」と敗戦直後の荒廃した様子が語られている。

「西村勝三の石像建つ 戦前の銅像建設代表者大沢省三の嗣子、大沢亨(日本製靴社長)はこれを嘆いて23年秋、友人の全国靴商工会の内田二十三、木内豊助と協議した結果、銅材は統制物資で入手できないため、石像に代えても、ぜひ再建したいものだ、意見の一致をみた。

24年(1949年)1月、業界各方面に働きかけて西村翁石像再建委員会を設立した。会長に宮沢胤勇、委員長に内田二十三を推し、建設費用百万円は靴関係と皮革関係が折半して負担、帝展無鑑査八柳恭次がこれを製作した。台石正面の文字は大沢亨、碑文は宮沢胤勇が執筆した。」とある。

『靴商工新聞』(昭和24年4月5日号)に〈感激の石像除幕式〉の記事が載っている、その大略を転記してみたい。

「製靴・製革の先覚者、西村勝三翁の遺徳をたたえ総経費百万円をもって企畫された丈六尺の大石像は、青山石勝の製作で見事に完成、本紙既報のごとく3月15日午前10時、向島須崎町の浄地においてGHQモントゴメリー女史(連合軍総司令部、皮革担当官)はじめ、皮革産業の名士200名参列のもとに盛大な除幕式が挙行された。

この日朝来冷雨そほ降る中に陸続とつめかける來賓の中に、西村家の当主直氏(品川白煉瓦重役)と令嬢三女彌生さん(24)四女和子さん

(21)の晴れの姿が人目をひき、石像の左右には寄贈の大花環が式場を美しく彩っていた。」

神官による神事もすすみ、各代表が玉ぐしをささげ、昇神の儀も終えるや「いよいよ西村直氏の介添で、翁の愛孫彌生さんの手によって除幕の綱が引かれると、翁の偉容がこつ然として衆目をあつめ、しばし劇的な感激のシーンが展開した。」(この項続く)



写真の油絵は、神田合同ビル5階の「西村記念室」に掲額されている「西村勝三翁の石像」(桜井利之進画)

かわとはきもの No.115

2001年3月30日発行

登録番号 12) 8

発行/東京都立皮革技術センター台東支所
〒111-0023台東区橋場1-1-6

TEL (3876) 2972ダイヤルイン

印刷/株式会社 第一印刷所

〒110-0003台東区根岸2-14-18

TEL (3871) 4 2 6 1代

本紙表紙記事の無断転載を禁じます。

R70

本文は古紙配合率70%再生紙を使用しています